

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年3月31日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530447

研究課題名（和文） マンガ制作プロセスの促進要因に関する日仏比較研究～作家・編集者の関係を中心に～

研究課題名（英文） Comparative study on the facilitators to the manga production system between Japan and France

研究代表者

川又 啓子（KAWAMATA KEIKO）

京都産業大学・経営学部・教授

研究者番号：00306854

研究成果の概要（和文）：本研究課題で実施した日仏出版社へのインタビュー調査から、コンテンツ創造には「信頼」が最重要要因であることが示された。マンガはハイリスクなビジネスであるがゆえに、創造基盤としての「信頼」（タスクに対する信頼（task reliability））と編集者の誠実さ（integrity）の重要性が当事者間で強く認識されている。しかし、作家・編集者の関係が成熟するにつれて、当事者間での意識が希薄になるのは、「信頼」が制作システムに埋め込まれるためであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In the *manga* creation system, the editor-*mangaka* (author) relationship requires trust: task reliability on both sides and, particularly, integrity on the editor's side. It is assumed that the *mangaka* and the editor-in-charge can commit themselves to the creation of the *manga* on a foundation of trust both in Japan and France. As this interactive working relationship grows, trust is to be embedded in the dyadic relationship and the production system.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経営学・商学

キーワード：商品開発、コンテンツ、マンガ、信頼、出版、フランス

1. 研究開始当初の背景

①着想に至るまでの経緯

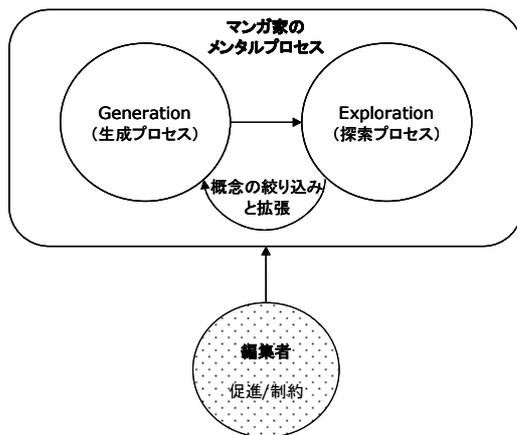
研究代表者は、2004年から2005年度の科学研究費補助金基盤研究(C)「コンテンツの製品開発プロセスに関する研究～コンセプト創造機能を中心に～」(課題番号16530285)において、Finke、Ward、Smithによるジェネプロア・モデル (geneplore model) を分析枠

組みとした、コンテンツ（少女マンガ）の開発におけるクリエイターの認知戦略に関する研究をおこなった。

当該モデルによれば、生成プロセスと探索プロセスが循環し、概念の絞り込みと拡張が繰り返されて成果物がうみだされる。その生成プロセスと探索プロセスの両方に制約が働くことで、創造の確率が変化すると考えられている。研究代表者による事例研究では、

アイデアからネーム（絵コンテ）までのコンテンツ創造のプロセスは、ある程度一般化可能であることが示唆された。

しかしながら、マーケティング研究の商品開発の文脈では、このモデルによって制作プロセスが記述できるというだけでは十分ではない。成果に影響を与える要因を識別することが大きな意味をもつと考えられるのである。すなわち、下図のサイクルの制約（促進）要因によって創造の確率が変わるのであれば、その要因は何かを探索することが重要であると考えられる。これが次の問題意識となり、本研究課題の出発点となった。



また、日本のコンテンツ産業の喫緊の課題として、「ワンソース・マルチユース（マンガから映画、テレビ番組というように、1つのコンテンツのフォーマットを他のフォーマットへと転用すること）」と「海外展開」が指摘されていることから、本研究課題では「海外展開」先の1つとしてフランスに注目し、日仏比較研究に取り組むこととした。

②研究対象選定理由

世界三大マンガ大国は、日本、アメリカ、フランスといわれているが、巨大な国内市場に比較すると、海外市場は相対的に規模が小さい。フランスがアメリカの約 1/5 という人口規模であるにもかかわらず、2008 年には 9,500 万ユーロ（同年アメリカ 1 億 7,500 万～2 億ドル）というマンガ市場を有する国であるため、同国を世界第 2 位のマンガ大国としてもさしつかえないと判断し、研究対象国とした。

2. 研究の目的

本研究課題「マンガ制作プロセスの促進要因に関する日仏比較研究～作家・編集者の関係を中心に～」(課題番号 21530447) では、

「編集者」をマンガ制作プロセスにおける制約・促進要因として、日仏両国における作家・編集者の関係が、マンガ制作にどのような影響を与えるのかについて検討することを目的とした。

3. 研究の方法

主に「信頼」概念に関するマネジメント分野における文献研究と編集者へのインタビュー調査をおこなった。海外で実施した調査は次頁「(2) フランスにおけるマンガと BD」①②③に要約されている。編集者へのインタビューは KAZE/Asuka をのぞき、通訳を伴って 1 時間半から 2 時間程度にわたり実施した。

また、マンガをはじめとするコンテンツ制作の関係者による講演会は貴重な情報収集の場であるため、国内外を問わず足を運び、情報を収集して事例研究をおこなった。

4. 研究成果

(1) 創造基盤としての「信頼」の役割

2009 年度

マンガ制作における作家の認知戦略についての考察 (5. [図書] ②) と、浦沢直樹 (マンガ家) と長崎尚志 (編集者) の事例研究をおこなった。つぎにコンテンツ創造の基盤として二者間関係における「信頼」が果たす役割についての予備的考察を国際アートマネジメント学会で報告した (5. [学会発表] ③)。発表した論文は、当該学会の Best Paper 候補の 1 つとなった (5. [雑誌論文] ④)。また、文化創造基盤としての「信頼」についての考察を深めるために、サービス・マネジメントの文献を研究・翻訳した (5. [図書] ①)。さらに、「信頼」研究の現状把握のために、European Institute for Advanced Studies in Management (EIASM) の「信頼」のワークショップにも参加した。

2010 年度

前述の信頼ワークショップで得られた示唆を踏まえて、上記の事例研究 (5. [雑誌論文] ④) を発展させ、創造活動の基盤としての信頼が果たす役割について、ヨーロッパ社会学会において論文を発表した (5. [雑誌論文] ③、学会発表②)。研究報告の会場では、編集者—著者の二者間関係において信頼が所与でない場合の制作プロセスの違い、他の芸術形態 (ダンス) においても、「信頼」の役割が重要であることなどが指摘され、興

味深い議論が展開された。

当日はアニメの原画販売を手がけたいというイタリア人女子学生も参加しており、フランスに限らずイタリアでも日本のコンテンツが浸透していることが想像された。また、本論文が学会サイトに掲載された結果として、Naoki Urasawa (2012年5月刊行予定・フランス)の著者である Alexis Orsini 氏から質問をうけるなど予想外の展開もあった。同氏によればマンガ関係のフォーラムで当該論文の URL を見つけたということである。

そして、日本最大のマンガ雑誌『少年ジャンプ』を擁する集英社の編集者へのインタビューをおこなった。日本のマンガ出版関係者は多忙を極めるため、長時間におよぶ今回のインタビューは大変に貴重な機会であった。

2011年度

集英社のマンガ制作プロセスについて、国際アートマネジメント学会で発表した(5. [雑誌論文] ②、学会発表①)。フロアからはマンガ開発の枠組みを用いて、他のコンテンツ(映画)を分析することにより、コンテンツ開発の創造基盤としての「信頼」の役割を明確にできるのではないかと指摘をいただいた。3年間のまとめとして論文を発表した(5. [雑誌論文] ①)。

(2) フランスにおけるマンガとBD

フランスにはバンド・デシネ (BD=Bande Dessinée) と呼ばれる、日本のマンガ、アメリカのコミックスに相当するコンテンツがあるが、子供かマニア向けと認知されている。いっぽう、毎年7月に開催される Japan Expo の盛況ぶりからも分かるように、マンガを含む日本のコンテンツは広く受容されており、フランスではマンガが月刊書籍売上げのトップになることすらある。フランスで日本のマンガが急激に普及した理由の1つは、思春期の若者と少女層向けのBDが存在しなかったことにあるといわれているが、フランスのこのような現状についても考察した(5. [雑誌論文] ⑤)。

海外の視察先では、日本のマンガやアニメが広くフランスの若者に受容されていることが推測された。とりわけ、前出の Alexis Orsini 氏が、パリ第2大学 (パンテオン・アサス Université Paris II/Panthéon-Assas) の現役大学生であることや、アニメの原画販売を手がけたいとするイタリア人女子学生、国際アニメ映画祭 (アヌシー) のマンガ家志望のイギリス人女子学生の存在は、フランスばか

りではなく、ヨーロッパにおける日本の「ソフト・パワー」を実感させるもので、文化交流の面からも非常に興味深いものであった。

①インタビュー先 (フランス)

日程	訪問先	概要	主な作品
2011/2/22	KAZE/Asuka	マンガ専門出版社 (2004年設立)	ブラックジャック、七色いんこ、GUNSLINGER
2011/2/22	Tonkam/Delcourt	BD 出版も行う	NANA、フルーツバスケット、金田一少年の事件簿、キャッツアイ
2011/8/19	KAZE/Asuka	マンガ専門出版社 (2004年設立)	ブラックジャック、七色いんこ、GUNSLINGER
2011/8/22	TAIFU	マンガ専門出版社 (2004年設立)	コブラ、メトロポリス、電車男、新白雪姫伝説プリーティア
2011/8/24	Pika	マンガ専門出版社	カードキャプターさくら、CLOVER、ガンダム SEED
2012/3/15	Glénat	BD 出版も行う	ドラゴンボール、OnePiece、新世紀エヴァンゲリオン、BLEACH

②視察先 (フランス)

視察日	視察先	国
a) 2010/6	国際アニメ映画祭 (Festival International du Film d'Animation d'Annecy)	フランス・アヌシー
b) 2011/6	ジャパン・エキスポ (Japan EXPO)	フランス・パリ
c) 2012/3	パリ・ブックフェア (Salon du Livre)	フランス・パリ

③講演会・シンポジウム (フランス・日本)

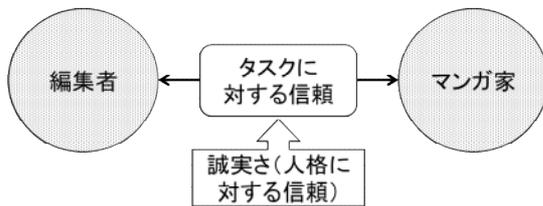
視察日	視察先	講演者
a) 2010/6	国際アニメ映画祭	欧州のアニメ制作会社、Pixar 社
b) 2011/6	ジャパン・エキスポ	清水義裕 (手塚プロダクション著作権事業局局長)
c) 2012/2	東京日仏学院	マチュー・ユナ (Ankama Japan 社長)
d) 2012/3	パリ・ブックフェア	ヤマザキマリ (マンガ家)、萩尾望都 (マンガ家)

(3) 日仏比較

本研究課題のインタビュー調査で浮かびあがってきたのは、マンガやアニメ、ゲームなどのコンテンツの開発は、商品開発のなかでも、とりわけハイリスクと考えられており、「ヒットするかしないか分からない」という関係者に共通する認識であった。つまり、まずは「信頼ありき」ということで、「信頼」はハイリスク商品 (マンガ) の創造基盤の前提条件であると考えられる。具体的には、信頼の形成の初期段階では、マンガ家と編集者の双方のタスクに対する信頼 (task reliability) がもっとも重要であると考えられる。あわせ

て、誠実さ (integrity) = 編集者の人格に対する信頼がハイリスクなビジネスの基盤となり、創造活動を推進するドライバーになるものと思われる。

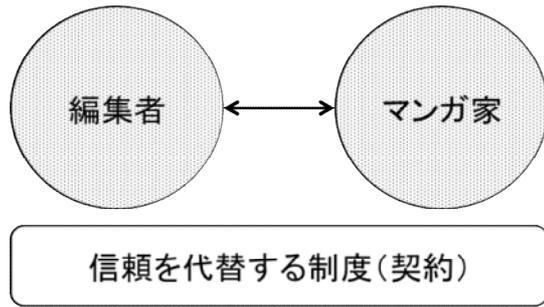
日本では、作家・編集者の関係が成熟するにつれて、信頼が事者間では意識されなくなり、二者間の信頼はマンガ制作プロセスにおける、埋め込まれた信頼によって代替されるのではないかと考えられる。マンガ制作は編集者とマンガ家の共同作業のように進むが、タスクに対する信頼 (task reliability) が達成されれば、日本のマンガ制作システムが創作を下支えしていく。これに、編集者の人格要件 (誠実さ integrity) が満たされれば、マンガ家にとっては理想的な環境を提供することとなる。



いっぽうフランスでは、マンガ制作における作家の芸術志向性・独立性が強く、編集者の介入が少ない。その結果として、編集者が果たしうる役割が日本に比べて小さく、二者間の関係性が BD 作品を創造する促進要因にはならない可能性がある。

フランスにおけるインタビュー調査では、絵を描く才能よりも信頼できる人物であるかどうかが最重要項目であるとする編集者もいれば、別の編集者は、米仏の出版社間ではまずは契約ありきで、契約書さえあれば相手に対する信頼がなくとも構わないという。いっぽう、日仏の関係では、信頼ありきで契約書がビジネスを始めてから半年後にくることすらあるらしい。しかもそれでビジネス上の問題は発生したためしがないようだ。また、仏仏関係は、契約書があっても、信頼関係にあると思っけていても、常に相手に対する警戒を怠らないことが必要であるという編集者もいた。

このように「信頼」という言葉は、調査対象者のおかれる状況によって意味内容が異なっており、個人間や組織間、そして取引慣行など社会制度に対する信頼も包含している。今後は出版者の規模やビジネス歴などを勘案し、分類整理していくことによって、信頼概念の精緻化を計りたいと思っけています。



(4) 今後の課題

① 成果の国内外における位置づけとインパクト

2009 年の AIMAC (国際アートマネジメント学会) では、雑誌論文②がベストペーパー候補になったほか、2011 年の同学会では、フロアから貴重なコメントを得ることができた。日本のマンガの制作プロセスがほとんど知られていないことから、その紹介だけでも意義があること、また、「文化芸術創造基盤の研究」として、映画などの他のコンテンツへの適用の可能性があるのではないかとコメントをいただいた。学会誌へ投稿するようにすすめられた。

本研究課題は、現段階では個別事例の研究であるところに限界があるため、マンガ制作の事例を積み上げていくことや他のコンテンツへの適用を通じたモデル構築が必要であると考えている。

② 今後の展望

2012 年 9 月には、本研究の成果の一部をヨーロッパ社会学会 (The 7th Conference of the European Research Network Sociology of the Arts, Vienna, 5-8 September 2012) で発表することが決まっている。さらに、国際アートマネジメント学会 (AIMAC) の学会誌 (*International Journal of Arts Management*) への投稿を目指している。

また、他のコンテンツの創造基盤の研究を推進するためには、アメリカとの比較研究が必要となるため、日米仏の共同研究を志向する研究者ネットワークの構築を目指して、今後も研究を推進していく予定である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 川又啓子、Preliminary research on the Japanese content development process : Cases of manga、京都マネジメント・レビュー、査読無、19号、2011、17—41.
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008751244>
- ② 川又啓子、The Role of Trust in the Relationship between the *Mangaka* (Comic Author) and the Editor in the Creation of Japanese *Manga* (Comics)、Proceedings: AIMAC 2011 International Conference on Arts and Cultural Management、査読無、2011.
- ③ 川又啓子、Role of trust in the dyadic relationship between the author and the editor in the creation of Japanese manga、ESA Proceedings、査読無、2010.
http://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=1692190#%23
- ④ 川又啓子、Preliminary research on the creation process of Japanese manga、Proceedings: AIMAC 2009 International Conference on Arts and Cultural Management、査読無、2009。(学会でのBest paper 候補)
- ⑤ 川又啓子、フランスにおけるマンガ事情、京都マネジメント・レビュー、査読無、15号、2009、79—100.
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007481540>

[学会発表] (計3件)

- ① 川又啓子、The Role of Trust in the Relationship between the *Mangaka* (Comic Author) and the Editor in the Creation of Japanese *Manga* (Comics)、AIMAC 2011 International Conference on Arts and Cultural Management、2011年7月5日、ベルギー・アントワープ。
- ② 川又啓子、Role of trust in the dyadic relationship between the author and the editor in the creation of Japanese manga、3rd ESA Research Network Sociology of Culture Midterm Conference: Culture and the making of Worlds、2010年10月8日、イタリア・ミラノ。
- ③ 川又啓子、Preliminary research on the creation process of Japanese manga、AIMAC 2009 International Conference on Arts and Cultural Management、2009年6月30日、アメリカ・ダラス。

[図書] (計2件)

- ① [翻訳]ヘスケット他著『OQ: オーナーシ

ップ指数』、川又啓子他訳、同友館、2010、1章1—21、4章71—93、8章197—224 (担当)。

- ② 岩田貴子他編著『遊・誘・悠の商品開発』、同友館、2009、63—99 (担当)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

川又 啓子 (KAWAMATA KEIKO)
京都産業大学・経営学部・教授
研究者番号：00306854